

## 応援メッセージ

中京大学校友会会長 森谷敏夫

日本では長引くコロナ感染緊急事態がやっと収まりかけつつありますが、まだ予断を許さない状況であることに違いはありません。世界中の人々の暮らしや経済活動がこれほどダメージを受けたことは、リーマンショック以上であり、まさしく「想定外」と言わざるを得ないと思っています。その渦中で大学の講義がオンデマンドで再開されていますが、多くの学生諸君がバイト収入の激減、インターネット環境の整備に関する新たな出費、ままたらぬ就職活動、不安だらけの将来など、経済的にも精神的にも辛い日々を送っておられることと察します。

小生も中京大学体育学部を卒業して、アメリカに留学、南カリフォルニア大学でスポーツ医学博士号 (Ph.D.) を取得後、テキサス大学、テキサス農工大学大学院で助教授、その後、中京大学卒業生で初となる京都大学教養部助教授、大学院人間・環境学研究科教授として京都大学で定年退職までの31年間、研究と教育に携わり、名誉教授の称号を授与されました。小生がアメリカ留学した時は1ドルが360円の時で、新任の高校の先生の月給が2万3千円程度で、羽田からロサンゼルスまでの片道航空チケットが30万円だった記憶があります。漁師をしていた父親を大学2年の時に無くし、アメリカ留学の渡航費は3年と4年時に土方(ドカタ) 仕事をして稼ぎました。留学中の学費や生活費はもちろん渡米後、自分で稼ぐしかなく、勉学の傍ら体操のコーチと夜の日本食レストランの給仕兼皿洗いで耐えました。経済的に困窮し、一日一個のインスタントラーメンで過ごした日が何日もありました。実際の大学院の講義は半分程度しか聞き取れなくて、英語もろくに話せない状況でした。GPAが3.0を下回ると大学院生としての資格がなくなり、日本への強制送還となる時代でした。中京大の友人や先生方に「アメリカ留学して博士号を取得してきます！」と言って日本を離れてきた中で、「単位が取れなかったので、帰国しました」では、最悪のシナリオとなる、これだけはどんなことがあっても避けたい、避けなければならない立場に追いやられていました。日本人としてのプライドと中京大学で培った「真剣味」を胸に秘め、自分の人生の中でこれほど勉学に取り組んだことはない日々を送りました。修士課程ではGPAを3.75でクリアし、博士課程では南カリフォルニア大学の Barbara Godfrey Research Award を獲得し、スポーツ医学研究科を首席で卒業しました。

この辛く苦しい経験はその後の自分の人生の大きな原動力となり自信となって今も体の中で脈打っています。留学中に亡くした母親が常日頃言っていた言葉に「苦労は金で買ってでも積みなさい」「稲穂は実れば実るほど穂(頭) が下がる」。いまだに金言だと思ってます。今までの中京大学生には経験できなかったこの困難を前向きにとらえ、しなやかに生き延び、たくましく成長していく絶好のチャンス。中京大学の学生諸君、頑張って乗り越えていきましょう。Yes, you can. Because “you are your dreams”.